

椿—想い出すままに

一一二回生 大森 信

我が家の壁に「椿」と題した小さい版画がかかっている。「しづ」の署名が入った西澤静男先生の作品である。後年の文人形人などの、おどろおどろしい情念の作品とは違って、ほのかな暖かみを感じるその小品は、先生のお宅を最後に訪れたとき、どれでも気に入ったものがあつたらもって行きなさいといわれて見せられた作品の中から選んだものだ。版画を見るたびに、先生のことを思い出す。

私が千二小学校の5年生になったとき（1948年4月）、西澤先生が絵の指導に来られることになった。それまで、図工という時間があつたような気もするが、学校でどんな絵を描いていたのか、私は全く覚えがない。もしかしたら絵の先生がいなかったもので、「美術」の時間はなかったのかもしれない。それから、ユーモアにあふれた温かみのある先生の話を聞くのが私には新鮮で、とても愉しかった。美術という言葉を覚えたのも西澤先生の話から

だった。ある日、セザンヌという絵描きがいて、そのひとが自然を円筒形と球形と円錐形に分析して絵を描いたという話を教室で聞いて、「なんのことがわからん」と先生に尋ねたら、他人がやらない方法で絵を描きなさいと云うようなことをいわれたように覚えていいる。それで、まだ粗末だった画用紙の上に4Bの鉛筆の芯を紙から放さないように一本の線をつけて級友の顔を描いたら、それが「玄関貼り」になった。

千二小学校の正面玄関を入ると左側に校長室があり、右側にヒマワリを描いた西澤先生の大きな日本画が架けられていたが、その横に展示板があつて、先生が選ばれた学童の作品がしばらく貼られることがあつた。それが玄関貼りである。しかし、そのあと工作の時間に凧を作ったとき、凧に絵を描いてくるようにいわれて、私が絵本にあつた地雷也だったか歌舞伎役者だったかの顔を写していったら、こんなものはだめだと一喝された。

5年生から私は美術部に入つて、西澤先生の指導を受けた。学級は違つていたが大久保千尋さんも一緒だった。そして、美術部員の多くが豊津にあつた

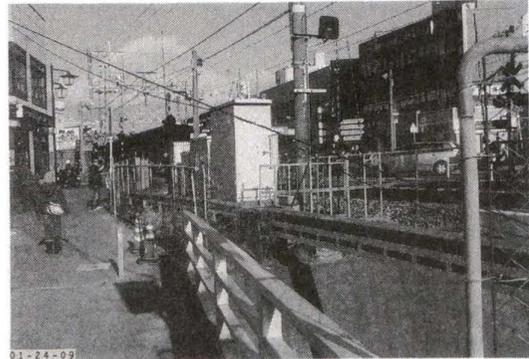
先生のご自宅に絵の稽古に通った。毎週日曜日の午前9時ごろに、いつも私は近所の日向宏太郎君と連れ立って電車で豊津に向かい、木造の橋を渡って土手の下にあった西澤先生のお宅に行った。先生の家は路地に面していて、平屋のモルタルの壁にはツタが絡み、玄関ドアの摺りガラスには縦書きで「西澤童画研究所」という透かし文字が入っていた。両開きのドアを開けて狭い土間から上がると、片流れの屋根に天窗のある板の間が絵を描くアトリエだった。私たちはそこで器に盛られたイチジクやリンゴを描いたり、先生と冗談を言い合って騒いだりしていた。西澤先生は私にジャガイモというあだ名をつけてからかわれ、私は無精ひげの先生にタワシと云う名を奉って対抗した。楽しい日曜日の午前、アトリエには静かになり、また時には笑い声が弾んだ。家の裏にはイチジクの木があって、窓を開けるとそよ風とみどりの光が射し込んだ。

豊津の泉町のあたりは今はどうなっているのだろう。路地からメガネのタワシ先生がひよいと出てこられるような気がする。

編集部より

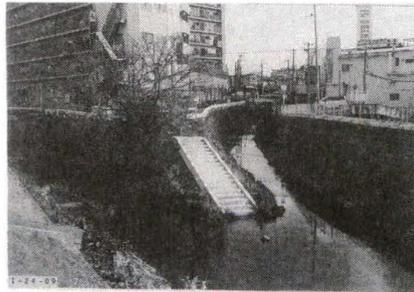
少女が大事そうに両手で受けるように持っている「椿」一輪、モノクロの背景に「椿」の赤が印象的です。カラーページに掲載しております。

糸田川の橋上から豊津駅を望む



01-24-09

糸田川堤防より



1-24-09